

常念岳・槍ヶ岳 山行報告

報告者：M3 大橋雄一

○ 概要報告 ○

日程：2009年8月5日（水）～8日（土）

メンバー：M3 只左一也、M2 仙田尚之、M2 米田立、M3 大橋雄一

山域：北アルプス南部（常念岳・槍ヶ岳）

目的：夏の北アルプス南部域の山行を経験する。

行動：

- 1日目：横尾集合 ⇒ 蝶ヶ岳を目指し途中で引き返す ⇒ 横尾(幕営)
- 2日目：横尾 ⇒ 蝶槍 ⇒ 常念岳 ⇒ 蝶槍 ⇒ 蝶ヶ岳 ⇒ 横尾(幕営)
- 3日目：横尾 ⇒ 槍ヶ岳 ⇒ 横尾(幕営)
- 4日目：横尾解散

次ページ以降、各日について詳しく報告させていただく。写真はすべて只左によるものである。

○ 1日目 (8月5日) ○

10:00	横尾集合
11:04	横尾(約 1,620m)発
13:00 頃	蝶ヶ岳・蝶ヶ槍分岐手前で引き返す
14:04	横尾着(幕営)

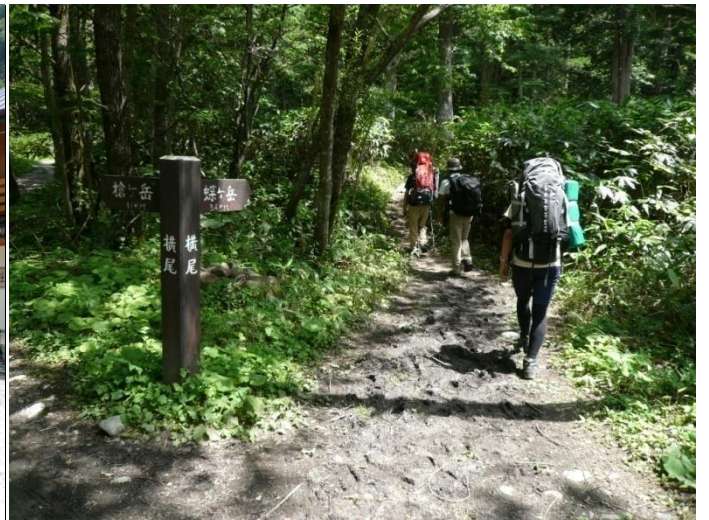
(行動時間:約 3 時間)

M3 只左が北アルプス南部縦走を計画した。これは夏の合宿というコンセプトに基づいたもので、4 名が参加することとなった。そこで横尾を集合場所とし、只左・大橋は涸沢ヒュッテから、仙田・米田は上高地から横尾へと集合した。計画では、横尾 ⇒ 蝶ヶ岳 (1 日目幕営) ⇒ 常念岳 ⇒ 大天井岳 (2 日目幕営) ⇒ 西岳 ⇒ 槍ヶ岳 (3 日目幕営) ⇒ 槍沢 ⇒ 横尾という 4 日間の馬蹄形縦走を予定していた。

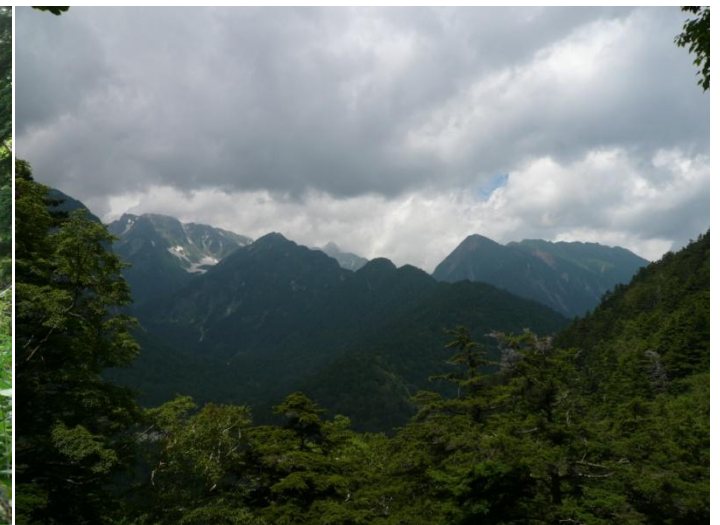
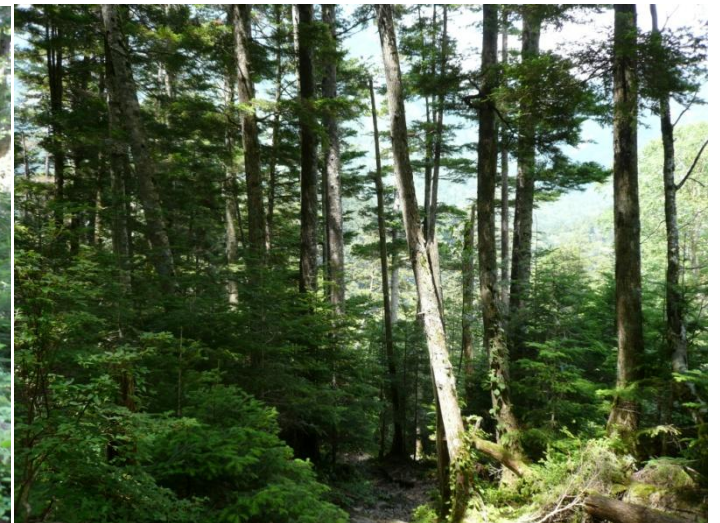


(左：涸沢を 8 時前に出発し横尾へ。今年は残雪が多かった。 右：ゆっくりと歩き横尾に 9 時 30 分頃着。)

只左・大橋が 9 時半頃に横尾に着いたときには、すでに仙田・米田が到着していた。仙田が前に涸沢に入った際、足に違和感を覚えたことがあったらしく、ここで入念にストレッチをした。予定よりも約 1 時間遅く 11:04 に横尾を出発し、蝶ヶ岳を目指す。この登りは急であったが、涸沢への登りと雰囲気が一味違い、とてもさわやかで気持ちのいい場所であった。只左以外はまともな縦走の経験がないに等しく、重い荷物を背負い同時に期待と不安を抱きながら登って行った。



(左：横尾の分岐標。 右：横尾山荘脇の槍ヶ岳・蝶ヶ岳分岐。)



(右：雲に若干隠れているが槍ヶ岳が望まれた。)

登っている最中で、仙田が足の違和感に痛みを伴うようになった。荷物を分配しなおし様子を見ていたが、途中で縦走を全てこなすのは困難と判断し横尾に戻ることにした。横尾には14時ごろ着き、幕営した。いつも涸沢への通過点としての認識しかない横尾で幕営するのは何か新鮮であった。

ここで計画を変更し、2日目(8月6日)は横尾―常念岳のピストン、3日目(8月7日)は横尾―槍ヶ岳のピ

ストーンを行うこととした。どちらも軽装ではあるものの行程距離が長く時間もかかることが予想されたため、この日はゆったりと夕飯を食して英気を養い、明日の早い起床に備えて早めに就寝した。



(右：14:04 横尾着。)



(左：横尾では他にも幕営するパーティが10弱あった。見に行っていないがもう一ヶ所のテント場もあり、合わせるともっと多くのパーティがいたのだろう。)

○ 2日目 (8月6日) ○

02:00 頃	起床	
02:29	横尾(約 1,620m)発	
04:56	蝶ヶ岳・蝶槍分岐(2,625m)	
05:08	蝶槍(2,664m、41 分間)	05:49 発
07:02	他のパーティ救護(25 分間)	07:27 発
09:05	常念岳(2,857m、34 分間)	09:39 発
12:38	蝶ヶ岳・蝶槍分岐	
13:00	蝶ヶ岳(2,677m)	
13:05 頃	蝶ヶ岳ヒュッテ(約 55 分間)	14:01 発
14:24	蝶ヶ岳・蝶槍分岐	
16:26	横尾着(幕営)	

(行動時間:約 14 時間)

2 日目の予定は、横尾 ⇒ 常念岳 ⇒ 蝶ヶ岳 ⇒ 横尾というピストンである。山と高原地図(昭文社)のコースタイムを単純に足し合わせると 14 時間となり、休憩時間なども含めて考えると歩き切ることができるかは、実際に歩いてみないと分からないような状態であった。軽装であるから可能であると思われるが、あとはメンバーの調子や天候などによってしまう。とりあえず常念岳を往復し、蝶ヶ岳は時間的・体力的余裕があれば行くこととして登り始めた。

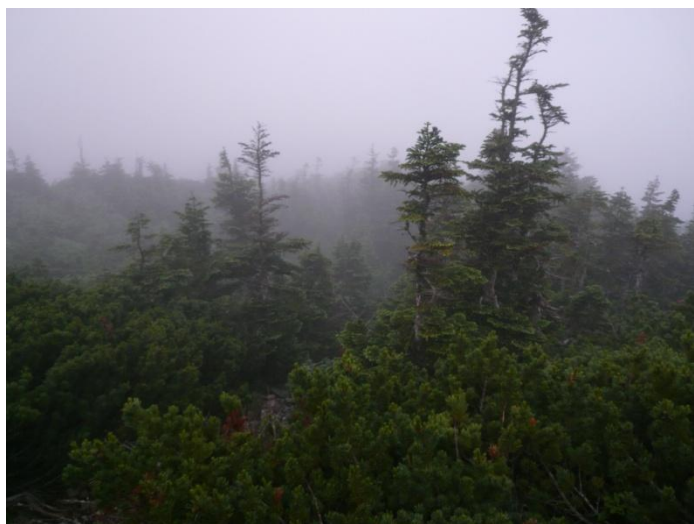
長時間の行程になるので、起床は 2 時とし、準備をしたのちすぐに横尾を出発した。仙田はまだ足に違和感があるようで、残念ではあるが横尾待機が良いだろうという自己判断であった。そこで只左、米田、大橋の 3 人で常念岳を目指して 2:29 に出発した。

最初の登りは標高差が約 1,000m あり、それを約 3 時間で行くというなかなかの急登であった。先頭を大橋が歩かせてもらったが、暗い中でのルートファインディングは良い経験となった。黄色いペンキによるマークが多く施されていたのでレベルとしてはそこまで高いものではなかったのだろう。しかし不慣れな私は、時に行く方向を誤りそうになったり、暗い中でなかなかマークが見つけれなかったりしてとても難しく感じられた。とはいえ、そういった試行錯誤をしながら慎重に登っていくのもまた山の楽しみだろうと思った。



(左: まだ暗いうちに横尾出発。 右: 標高差約 1,000m の急登を 3 時間弱で行く。)

鳥たちが早朝のさえずりを始め大合唱となると、次第に空が白んできて、そのあたりで森林限界を越えて稜線がよく見えるようになった。足元もガレとなり、そこからは 10 分ほどで蝶ヶ岳・蝶槍分岐に至った。結局、約 2 時間半というとても良いペースで急登を越え稜線へと出ることができた。



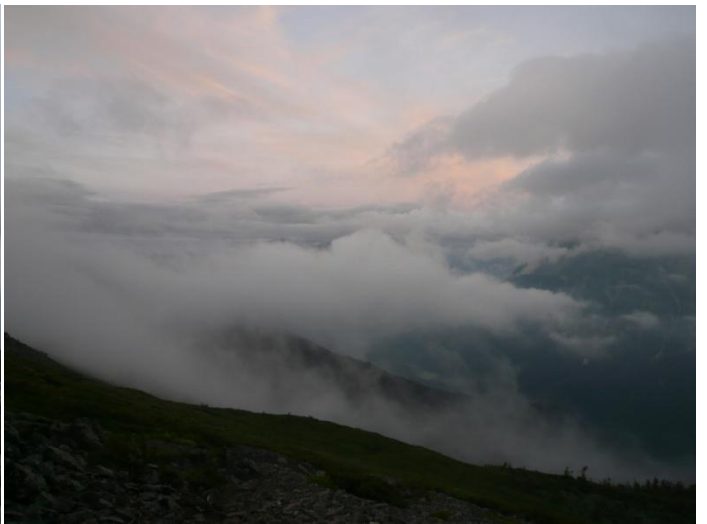
（左：森林限界を越えて急登を見返す。 右：空が白み、足元がガレてきた。）



（左：蝶ヶ岳・蝶槍分岐）

分岐から西を見ると、穂高連峰が目の前いっぱい泰然と構える姿が飛び込んできた。東は雲海が覆い、遠く八ヶ岳が見えている。これは美しい日の出が見られるに違いない、という期待に足取りも軽く蝶槍までを急ぐ。

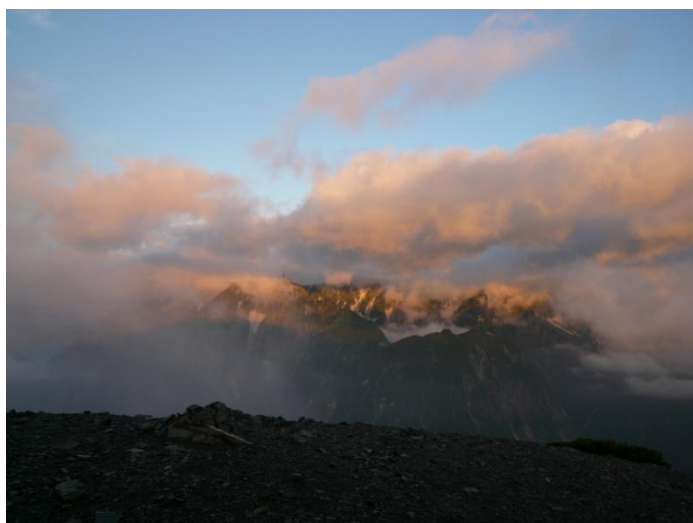
そして、蝶槍で日の出を迎える。東の雲海を黄金色に染めながら日が昇り、穂高の山々が赤く焼けていく。期待以上に美しい光景であった。天気もよく、行く先の稜線に常念岳がきれいに見えていた。ここで 40 分ほどの休止を取って朝食とし、常念岳を目指した。



（左：西には雲に隠れた穂高連峰。 右：稜線から東を見ると、日の出前の雲海があった。）



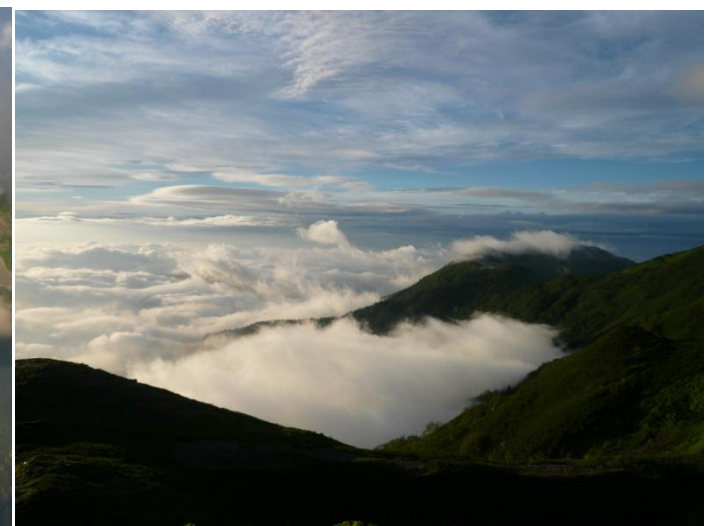
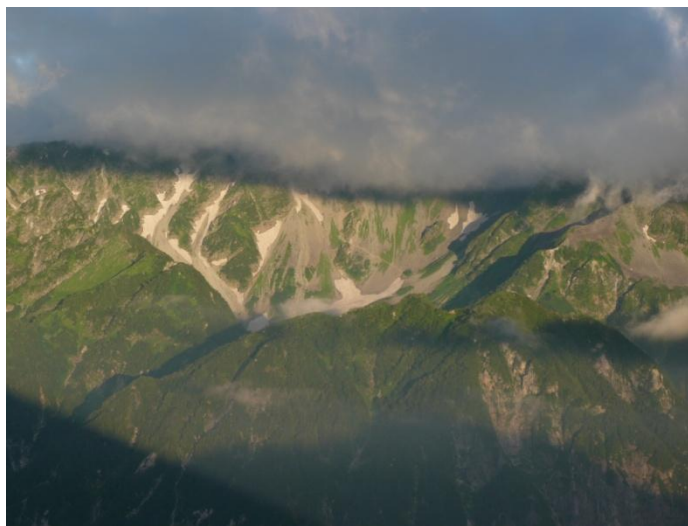
（左：蝶ヶで日の出を見るために足をはやめる。 右：日の出。）



（左：朝焼けの穂高連峰。 右：蝶ヶから南を見る。）



（左：稜線の先に常念岳の雄姿。 右：太陽が雲海を染めていく。）



（左：涸沢カールが雲の下に見える。写真では分かりにくい、ザイテングラードなどについている道もはっきりと確認できた。）

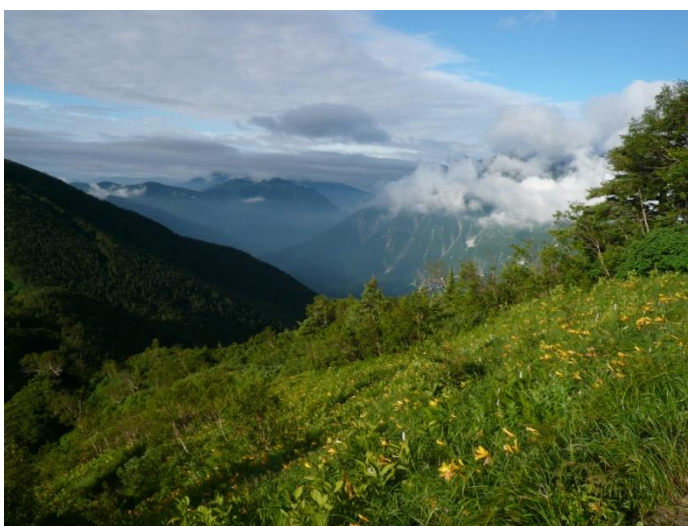
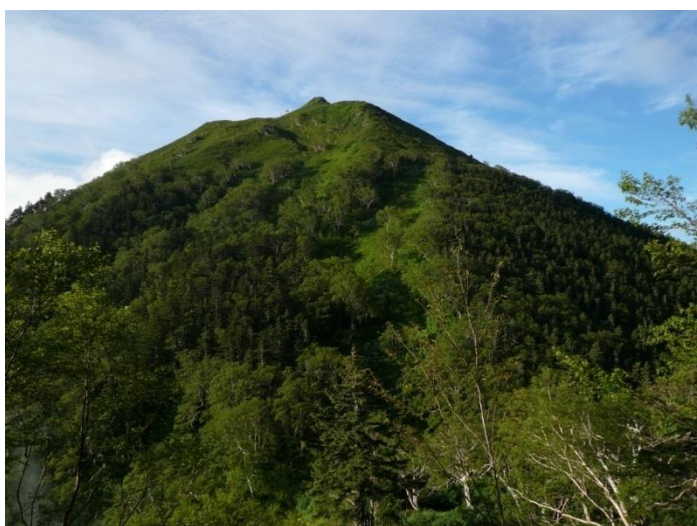
蝶ヶ嶺からは稜線を歩いて常念岳を目指す。まずは少し高度を落とし、何度か小さなピークを越えながら林の中を歩いていく。美しい緑の中に多くの花が咲いており非常に気持ちのいい歩きであった。天気もよく、次第にその姿を大きくしていく常念岳を前に見ながら進んで行った。稜線歩きの醍醐味を感じられた。

稜線の途中、テントを張っている 50 代ほどのご夫婦に出会った。奥さまが前日に足首を捻挫してしまって先に進めなくなり、風のあまり当たらないこの場所でビバークしていたとのことだった。常念岳の姿を見上げて歩いた際に、足元を見ていなかったために転倒してしまったようだ。話を聞くとお二人はヒマラヤなどにも登山経験があるらしく、そんな経験者であってもこのような事故が起こるのだ、と改めて山の難しさを思い知らされた。只左がテーピングなどを施し、また荷物も数 kg 任されて先に行って常念小屋に置いておくこととなった。私たちも時間的余裕がそれほどあったわけではないがこういうときはお互いさまである。この時、ちょうど槍ヶ岳が目の前にそびえていて非常に美しかった。

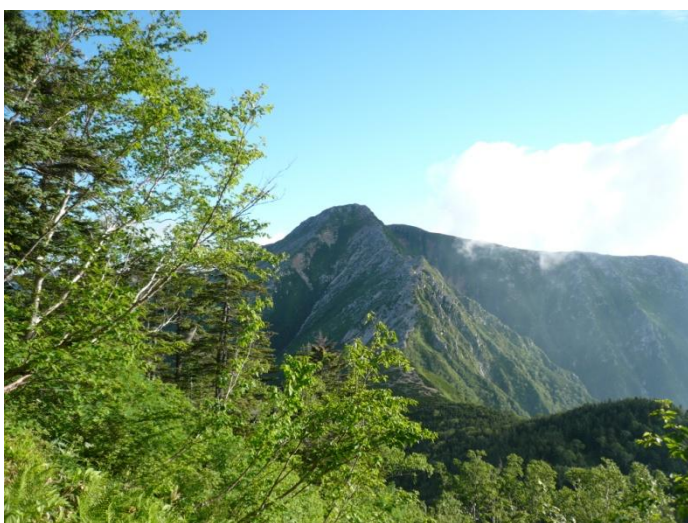
そのようなハプニングに遭遇しつつも、常念岳手前の最低地点（約 2,480m）に至る。ここから常念岳山頂（2,857m）まで標高差 500m を一気に登っていく。



（左：蝶槍から高度を落とし、林を進んで行く。）



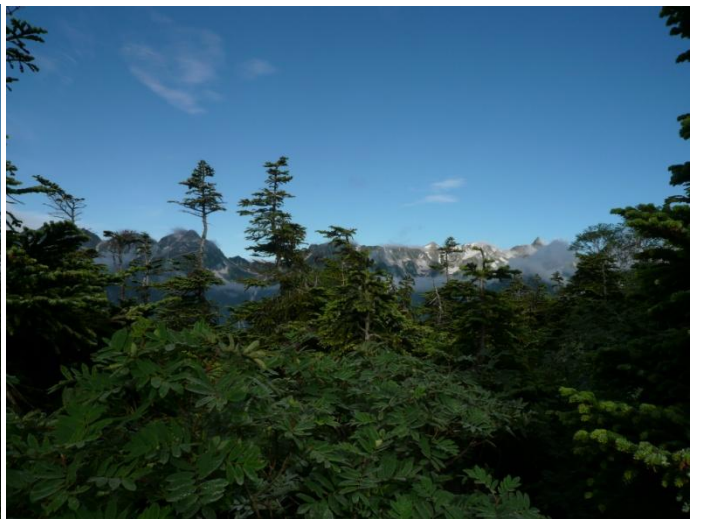
（左：常念岳との間にある小さなピーク。 右：ニッコウキスゲの群落と穂高。）



（左：常念岳の姿が大きくなっていく。 右：常念岳。）



(左：常念岳。 右：雲海の向こうにうっすらとハケ岳が見えている。)



(右：木々の間から穂高～槍ヶ岳が見えていた。)



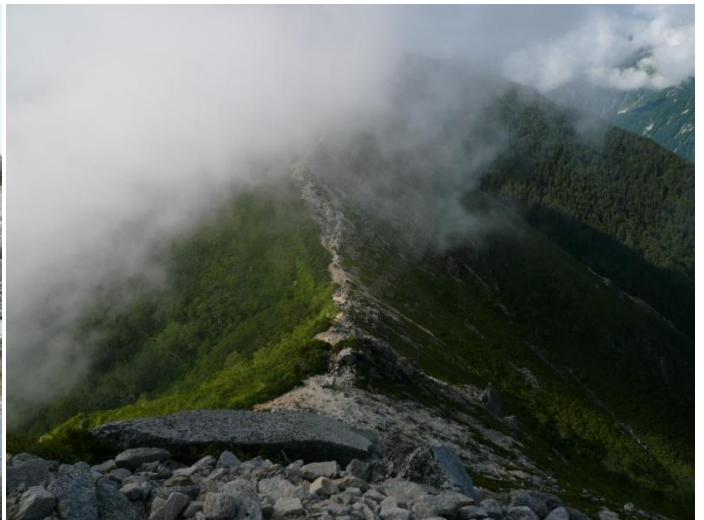
(左：ご夫婦がピバークしていた地点を振り返る。 右：常念岳をバックに。)



(左：いよいよ常念岳が目の前に。 右：手前の最低地点から常念岳を見上げる。)

常念岳は、白い岩肌と緑のハイマツが素晴らしい色彩のコントラストをなし、とても美しい姿であった。実際に歩いてみると、鮮やかな緑のハイマツが岩々のまわりに自然と配置され、ひとつの庭園のような様を呈していた。しかし、この登りの途中から稜線を東からガスが越えはじめてしまった。常念岳山頂を踏んだ時にはすでにあたりはガスっており眺望は得られなかった。山頂には9時ごろに着いた。横尾を出発してから6時間半が経過していた。

今度は今来たこの稜線に戻っていかなければならない。ガスってきたために雷の心配も出てきた。もしそのような事態になったとしても稜線を外れるようなエスケープルートは取れないから、昼食を食べ、すぐに引き返すこととなった。そういった理由もあって、稜線の先にある常念小屋を往復するのは難しかったため、先のご夫婦から預かった荷物は大きなビニールに入れて山頂に置いておくことにした。



(左：美しい「庭園」の中を登っていく。 右：後ろを振り返ると稜線をガスが越えはじめていた。)



(左：セイウチのように見える岩。)



(右：後ろからガスが追い付いてくる。)

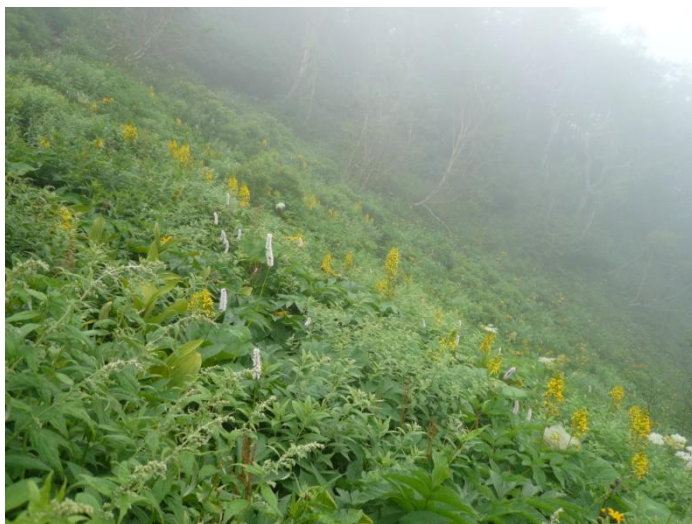


(左：山頂付近。すでにガスってしまっている。 右：常念岳山頂。)

30分ほど常念岳頂上に滞在して稜線に戻る。途中で先のご夫婦に出会い、荷物を山頂に置いてきたことを伝える。僥越ながらもお二人の無事を祈るばかりである。

同じコースとはいえ、時間帯も違うしガスってもいたから雰囲気は往路と異なっていて楽しかった。しかし夜

中のうちから歩き続けていたため、疲労感もかなりのものだった。山頂から3時間かかって、なんとか蝶ヶ岳・蝶ヶ分岐に戻ってきた。この時点で12時半頃であり、蝶ヶ岳往復が可能であると判断した。



(左：イブキトラノオなどが群生する美しい斜面。)



（右：蝶ヶ岳・蝶ヶ槍分岐まで戻ってきた。）

分岐から蝶ヶ岳までは 30 分弱であった。蝶ヶ岳のピークを踏んだあとに蝶ヶ岳ヒュッテに寄って、腹ごしらえをした。その後、ヒュッテの診療所にお邪魔させていただく。ここは名古屋市立大学医学部によるもので、医学部以外に看護学部などの学生も含めた学生ボランティアが運営しているそうだ。温かい飲み物をいただき、診療体制などについていろいろと情報交換をした。お話をしているうちに疲れも取れていき、横尾へと戻るだけの元気がわいてきた。温かく出迎えてくださった診療所の方々に感謝。



（左：蝶ヶ岳へのなだらかな稜線道が美しい。 右：蝶ヶ岳ヒュッテ。山頂はその奥。）



(左：蝶ヶ岳山頂。 右：蝶ヶ岳ヒュッテ。)

診療所にお邪魔させていただくなどヒュッテで1時間ほど休憩し、いよいよ横尾に戻る。ヒュッテから外に出ると若干の雨が降り始めていた。分岐から横尾に戻って下る。次第に雨脚が強くなってきたため、雨具を着こむ。横尾に着いたときには、歩きだしてからすでに14時間が経過していた。



(右：今日3度目の蝶ヶ岳・蝶槍分岐。ここから横尾へと下っていく。)



(右：横尾着は16時半頃。)

○ 3日目 (8月7日) ○

02:30 頃	起床	
02:50	横尾(約 1,620m)発	
03:37	一の俣	
03:47	二の俣	
04:15	槍沢ロッヂ(約 1,800m、29 分間)	04:44 発
05:10	槍沢キャンプ地	
05:36	大曲(約 2,100m、74 分間)	06:50 発
07:41	天狗原分岐(約 2,350m)	
09:05	殺生分岐(約 2,870m)	
09:45	槍ヶ岳山荘(約 3,080m、14 分間)	09:59 発
10:20	槍ヶ岳山頂(3,180m、3 分間)	10:23 発
10:54	槍ヶ岳山荘(49 分間)	11:43 発
12:21	殺生分岐	
14:00	天狗原分岐	
14:52	大曲	
15:46	槍沢ロッヂ(10 分間)	15:56 発
16:22	二の俣	
16:30	一の俣	
17:19	横尾着(幕営)	

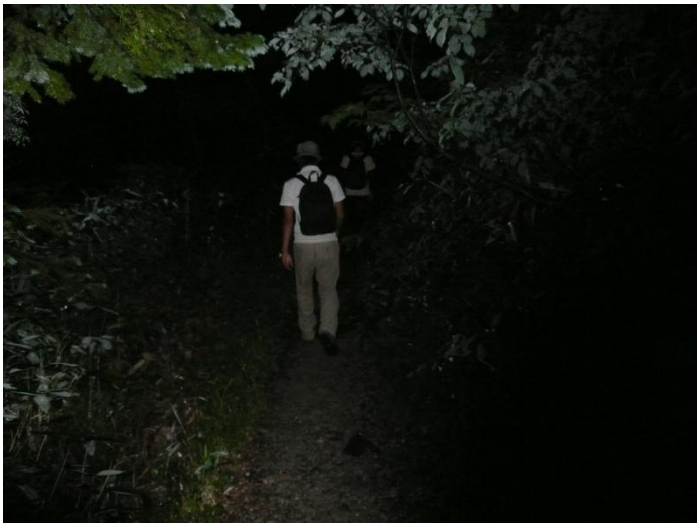
(行動時間:約 14 時間半)

3日目の予定は、横尾 ⇒ 槍ヶ岳 ⇒ 横尾というピストンである。ルートとしては槍沢に沿って山頂に至り、帰りも同じコースを降るという単純なものである。しかしこちらも地図上のコースタイムを足し合わせると 13 時間となり、軽装とはいえ、昨日の疲労なども考えるとなかなか大変な行程になることが予想された。

2時半頃に起床し、出発する。仙田は足に痛みはないものの慎重を期したいということで、再び横尾で待機という自己判断であった。起床時、小雨がぱらついていた。前日の予報では曇り～晴れという風だったので、そのうち雨は止むだろうと考えていたのだが、むしろ次第に雨は強くなっていく。初めは槍沢ロッヂで雨が止むのを待とうとも考えたが、そういった気配が全くなかったので、結局は雨具を着て先を急ぐこととした。



(左：3 時前の真っ暗な横尾を出発する。 右：一の俣道標。)



(右：槍沢ロッヂ。)

ロッヂを過ぎて槍沢キャンプ地を過ぎたあたりから私（大橋）が左のアキレス腱に違和感を覚え始めていた。そこで途中の大曲分岐で一度止まり、その違和感を消せるようにいろいろと試行錯誤した。完全に違和感が消えたわけではなかったが、只左の指示のおかげでだいぶ回復した。今思えば、仙田や前日出会った捻挫の方を見ていたためか少し足の感覚に慎重になりすぎたというきらいはあったのだが、ここで1時間以上も時間を費やしてしまった。

このあたりから、槍沢の上には雪溪が見られた。また、雨が持続的に降っていたため、晴れているときには無いであろう小さな沢が山肌を流れているのが何度も見られた。

大曲をすぎると次第に勾配も出てきて、雪溪をトラバースすることもあった。天狗原分岐についたころには、雨具の隙間から水が滲みて衣服も少し濡れ始めていた。



（左：槍沢に沿って歩く。 右：沢の上に雪渓が見られ始めた。）



（左：大曲。ここで私の足の違和感解消のために 1 時間以上費やしてしまった。）

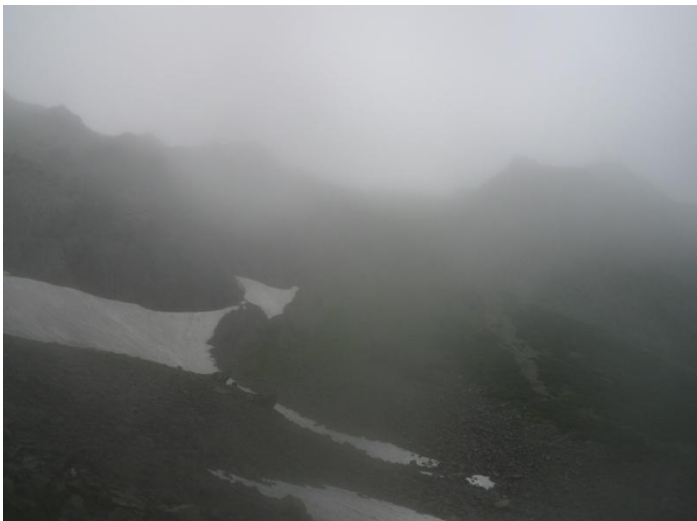


（右：降雨のために、沢向こうの山肌に細い沢がいくつもできていた。）



（右：天狗原分岐。）

天狗原分岐をすぎるといよいよ道は急峻となってくる。降雨と高度による寒さもあり、疲労色が濃くなってきた。雪渓とゴツゴツとした岩肌の組み合わせはなかなか趣のある様子だったが、槍ヶ岳の姿はガスで全く見えず残念だった。ところどころチングルマなど数種類の花の群落が見られ、雨と寒さの中で力強く可憐に咲きほこる姿に勇気づけられもした。なんとか頂上直下の槍ヶ岳山荘に到着した時には出発から7時間が経過していた。



（左：山頂がうっすら見えてきた。 右：殺生分岐。）



（右：出発して7時間、槍ヶ岳山荘に到着。）

山荘に荷物を置き、とにかく槍ヶ岳ピークを踏むことにした。山頂付近は雨とともに風も強い。クサリやハンゴが設置された道は滑りやすくなっていると同時に高度感もあって怖く、慎重に進んでいく。

20分ほどで無事に山頂には着いたが、もちろんのこと眺望は得られなかった。槍ヶ岳 3,180m、日本で5番目に高い。この時点で僕としては穂高に次いで人生で2番目に高い地点にたどり着いたことになったのでそれはそれで感慨深いものがあったが、今回はただピークを踏んだというだけで、といった感覚でしかなかったことも事実だ。また晴れている日に訪れたいと強く思った。

寒さもあり、すぐに山荘へ戻ることにした。下りはより滑落などに注意して降りていった。山荘で食事をとり50分ほど体を休めたあと、下山を開始した。慈恵医科大の診療所に寄るような時間的余裕がなかったのも残念だ。このときも雨はまだまだ降り続いていた。



(左；岩肌は濡れて滑りやすかった。 右：急峻な山頂へのクサリ場・ハシゴ。)



(右：最後の長いハシゴを昇り切ると山頂に到着。)



(左：槍ヶ岳山頂。 右：山頂にて。今度は天気の良いときには是非来たい。)



（左：槍ヶ岳山荘に戻る。東京慈恵会医科大学槍ヶ岳診療所には時間の都合上寄ることができなかった。）

下山時も雨は降り続き、ある程度下ると槍沢は濁流となっていた。また、往路で見られた細い沢は、もっと太い沢へと変貌を遂げており自然の恐ろしさを感じさせた。

12時前に山荘を出て、天狗原分岐に着いたのは14時であった。この分岐から30分ほど下ったところで、道を横切る流れに出会った。登っている際には全く気にならなかった細い沢が、7時間半の後には、安易に渡れないほどの奔流となって待ち構えていたのだ。これには少し度肝を抜かれた。10分ほど安全に渡れるところを慎重に吟味し、岩づたいに跳んでこれを越えた。若干スリリングな一場面であった。





（左：沢向いの細い流れが太くなっていた。 右：槍沢も濁流と化している。）



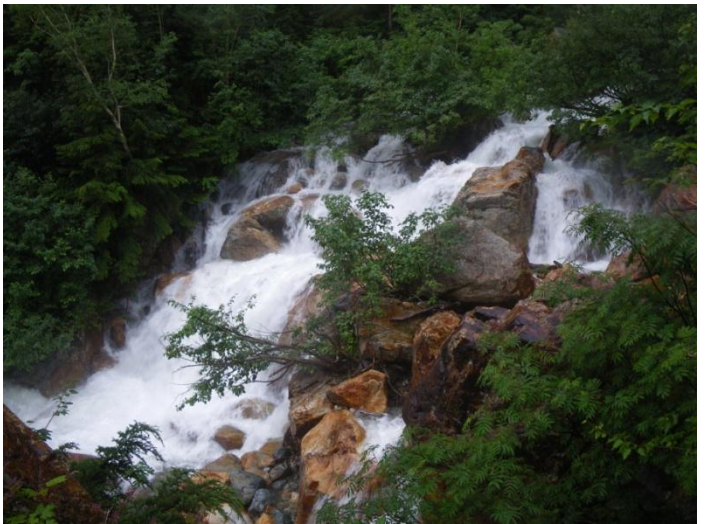
（左：道を横切っていた流れ。 右：近づいてみるとその流れの速さが分かる。）

これを越えたあとは槍沢沿いに特に問題もなく下っていった。行きで私が休むために座った岩の上に水が流れているなど、その変化に喫驚した。槍沢の大きな水流の音が谷に響いて、趣のある非日常的な雰囲気醸し出していた。結局、横尾に着いたのは少し薄暗くなり始めた5時過ぎであった。14時間半という長い行動時間となり、前日の長時間の山行と合わせて疲労困憊であったが、満足感は十分であった。横尾についたすぐ後から雨

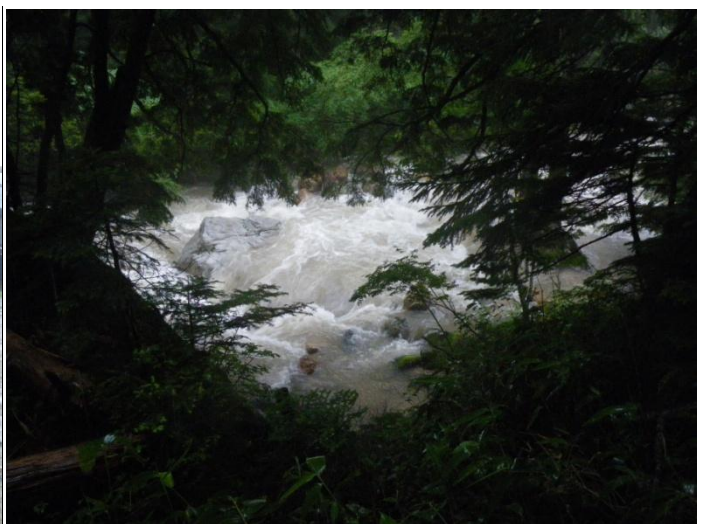
があがったのには閉口したが。



(右：大曲。行きに座って休んだ石が水の中。)



(右：このような美しい光景も。)



(左：11 時間ぶりの槍沢ロッヂ。 右：道から槍沢の流れを見下ろす。)



(左：一の俣道標。 左：横尾。)



(左：横尾に着くと同時に雨があがった。)

これで、基本的にこの日の山行は終わりなのだが、実はこの後、我々のテントが大きな水たまりの中に張られているのを見ることになった。あまりの雨にテントも水没していたのだ。留守番をしていた仙田は、テント内に侵入してくる水と格闘しており、こちらはこちらで大変だったようだ。結局、4人でテントの位置を直し、ここで最後の夜を過ごした。

○ 4日目 (8月8日) ○

この日はきれいに晴れ上がり、ゆっくりとテントを片づけて横尾で解散した。その後、只左・米田は涸沢ヒュッテへ向かい、仙田・大橋は上高地へと向かった。いろいろと紆余曲折はあったものの、常念岳および槍ヶ岳の山頂へと無事に至ることができ、北アルプスを満喫した充実の山行であった。



(横尾にて、4人の集合写真。)

.....(以上).....